

高等部教育目標				
イエス・キリストを通して、人と世界に仕える使命感と実力を養い、豊かな心と真摯な態度を備えた人格を培う				
探究型カリキュラム教育/学習目標				
SDGs の達成を目指し、Mastery for Service を体現する世界市民の一員として、国内外の社会に自ら関わり貢献できる力を育成する/身につける				
探究型カリキュラムにおける 5 つの学びの方針 Five Principles for Learning				
1. 自分事として ＜オーナーシップ/一人称＞	2. 社会/実践を通して ＜PBL 型/アクション＞	3. 知識を大事に ＜自ら得る知識/高める関心＞	4. ミニケーションを通して ＜自分/他者のやりとり＞	5. 生徒・教員が共に ＜共に探究する関係性＞
上位学習目標				
<p>【知識・技能】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アートの理解に必要な歴史的背景やモチーフ・技法・展示方法などを適切に用いることができる ・社会課題や哲学的言説について理解し、アートと関連させて説明することができる <p>【思考力・判断力・表現力】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アートを見て感じ取ること（＝感性）を通して社会課題を多角的にクリティカルに捉え、自分の考えを構築することができる ・物事に一つの解答を求めるのではなく、複雑なまま受け入れて熟考することができる ・自分自身の価値観やモノの見方を俯瞰し、他との関係性のなかで相対的に意味づけることができる <p>【学びに向かう力・人間性】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分自身を通して自由に世の中を捉えることで、自分の未来の可能性を開いていくことができる ・他者の表現や言説を自分の価値観に照らして、主体的に想像することができる ・作家が内省を突き詰めて作品と対峙することを追体験することで、内在する自己の有りように向き合う姿勢を身につける 				
下位学習目標				
<p>【知識・技能】</p> <ol style="list-style-type: none"> ①アート思考と論理思考の違いを理解し、用語として使い分けることができる。 ②対話型鑑賞や作品分析に必要な情報を集め、目的に応じて選択することができる。 ③アートにまつわる哲学的言説や時事、歴史的事実などについて自分の言葉で語ることができる。 <p>【思考力・判断力・表現力】</p> <ol style="list-style-type: none"> ①アートとそうでないものとの違いについて鑑賞者と作品との相対性やコンテキストによる関係性を意識して考察することができる。 ②一つのアート作品についての情報を総合し、自分なりの分析を施すことができる。 ③アートプロジェクトや文化政策、パブリックアート等を通してアートに関わる社会課題について推察し見通すことができる。 <p>【学びに向かう力・人間性】</p> <ol style="list-style-type: none"> ①より多くのアート作品や文献に触れようとすることができる。 ②一つの作品やプロジェクトに関する学びに対して時間をかけることができる。 ③自らの考えを昇華させるために、他者とアートについて語り、互いの価値観を認める姿勢を身につける。 				

授業日	4/16(火)	1 学期授業回数	1 回目 / 全 9 回
本時 学習目標	主なターゲット【知識・技能】 【思考力・判断力・表現力】 【学びに向かう力・人間性】		
	本時の具体的な目標 ・課題解決型探究学習と調査検証型探究学習の手法の違いを理解し、今後の自分の取り組みに活かそうとする意識をもつことができる。 ・アートにまつわる探究のテーマを想起し、自らの興味関心を明文化することができる。		
時間 授業内容	5 時間目	筑波大学芸術学部の卒業論文概要を読み、テーマの深化のさせ方や、キーワードについて理解する。 課題解決型探究学習のフレームを概観し、課題解決のイノベーションにはアート思考が必要であることに気が付く。	
	6 時間目	ブレインストーミングによってアートに関するコンテンツをピックアップし、どのように探究として深めていくことができるのかを話し合う。	
評価方法	振り返りシートの記入内容に対して以下の評価基準で行う。 ・記述条件を満たしているかどうか ・発見やひらめきの質と量 ・どこまでを知っていてどこからを知らないのかが把握できているかどうか		
宿題指示	振り返りシートの記入		

授業日	4/23(火)	1 学期授業回数	2 回目 / 全 9 回
本時 学習目標	主なターゲット【知識・技能】③ 【思考力・判断力・表現力】②③【学びに向かう力・人間性】①③		
	本時の具体的な目標		
	・ 芸術評論を講読しアートにまつわる諸問題について理解を深めることができる。		
	・ アートにまつわる諸問題を想起し、自らの観点で問を設定することができる。		
時間 授業内容	5 時間目	「バンクシーの社会的な問い」を講読し、「問い」の画期性が作品の価値とアーティストの名を高 め、鑑賞者に対しても「問う力」を促すことができるということを理解する。	
	6 時間目	自らの関心を基に、アートにまつわる諸問題に関する「問い」を立てることができる。	
評価方法	考察を記録シート、ルーブリックによる相互評価表を用いて評価する。		
宿題指示	「問い」を立て、ロイロノートで提出する。		

授業日	5/7(火)	1 学期授業回数	3 回目 / 全 9 回																																
本時 学習目標	主なターゲット【知識・技能】③ 【思考力・判断力・表現力①②③】【学びに向かう力・人間性】②③																																		
	本時の具体的な目標																																		
	・現代アートが「問い」を呈しているということについて具体例を示すことができる。																																		
	・サイエンスアートの「問い」と科学者の「問い」の違いについて理解することができる。																																		
	・研究計画書を前提に探究テーマを深化させる。																																		
時間 授業内容	5 時間目	生徒による『問から始めるアート思考』の講読、プレゼンを行った。アンディウォーホール『ブリロボックス』の事例を通して「日常で見るものも見方を変えればアート作品に置き換えることができる」という言説を解説し、森美術館での「私たちのエコロジー展」や瀬戸内芸術祭での「ゴミアート」の例を挙げ、社会問題とアートの関係について生徒がプレゼンを行った。																																	
	6 時間目	生徒があらかじめ考えてきていた「探究のテーマ」について、どのような関心から思い至ったのか、どのような手法でどのようなことを明らかにしたいのかを端的に発表しあった。																																	
評価方法	講読・プレゼン用のルーブリックに従って相互評価を行った。																																		
	<table><tr><td colspan="2">観点 1 文章表現を的確にとらえ朗読することができるかどうか</td></tr><tr><td>3 点</td><td>漢字の読みをあらかじめ調べており、難読語や特別な言い回しもスムーズに読むことができる。</td></tr><tr><td>1 点</td><td>ところどころ漢字の読みを間違えたり、読み間違えをしている。</td></tr><tr><td>1 点</td><td>間違えところが多く、スムーズな聞き取りがしにくい読み方をしている。</td></tr></table> <table><tr><td colspan="2">観点 2 文章の内容を的確にとらえ伝達することができるかどうか</td></tr><tr><td>5 点</td><td>筆者の独特の言い回しや、主張を分かりやすくみ抜き、うまく言い換えて伝えることができる。</td></tr><tr><td>1 点</td><td>筆者がこの文章で何が言いたいのがよくまとめられており理解できる。</td></tr><tr><td>1 点</td><td>筆者がこの文章で伝えたいことが不明瞭で、単に本文を切り貼りしてまとめただけの説明になっている。</td></tr></table> <table><tr><td colspan="2">観点 3 文章の内容を補完する具体的な資料を示し、探究的・分析的なプレゼンができるかどうか</td></tr><tr><td>9 点</td><td>該当の文章に関連する具体的な図やデータ、実物資料などを用いて筆者の主張の理解に加え、自らの視点で分析できている。</td></tr><tr><td>1 点</td><td>該当の文章に関連する具体的な資料を本文で紹介されたもの以外に見つけ、用いている。</td></tr><tr><td>1 点</td><td>該当の文章に関連する具体的な資料として本文で紹介された作品やデータだけを取り上げている。</td></tr></table> <table><tr><td colspan="2">観点 4 伝達しようという意欲の伝わるプレゼンテーションとなっているかどうか</td></tr><tr><td>3 点</td><td>プレゼン資料の準備、発表時に用いる表現やその順序が優れているだけでなく、声の大きさや視線、ジェスチャーも優れている。</td></tr><tr><td>1 点</td><td>プレゼン資料の準備、発表時に用いる表現やその順序について、あるいは、声の大きさや視線、ジェスチャーのいずれかが優れている。</td></tr><tr><td>1 点</td><td>プレゼンに対して十分に準備をしてきたとは言えない、あるいは、声が小さく自信がなさそうな印象を与えている。</td></tr></table> また、記録と考察の欄は後日、別のルーブリックに基づいて評価する。			観点 1 文章表現を的確にとらえ朗読することができるかどうか		3 点	漢字の読みをあらかじめ調べており、難読語や特別な言い回しもスムーズに読むことができる。	1 点	ところどころ漢字の読みを間違えたり、読み間違えをしている。	1 点	間違えところが多く、スムーズな聞き取りがしにくい読み方をしている。	観点 2 文章の内容を的確にとらえ伝達することができるかどうか		5 点	筆者の独特の言い回しや、主張を分かりやすくみ抜き、うまく言い換えて伝えることができる。	1 点	筆者がこの文章で何が言いたいのがよくまとめられており理解できる。	1 点	筆者がこの文章で伝えたいことが不明瞭で、単に本文を切り貼りしてまとめただけの説明になっている。	観点 3 文章の内容を補完する具体的な資料を示し、探究的・分析的なプレゼンができるかどうか		9 点	該当の文章に関連する具体的な図やデータ、実物資料などを用いて筆者の主張の理解に加え、自らの視点で分析できている。	1 点	該当の文章に関連する具体的な資料を本文で紹介されたもの以外に見つけ、用いている。	1 点	該当の文章に関連する具体的な資料として本文で紹介された作品やデータだけを取り上げている。	観点 4 伝達しようという意欲の伝わるプレゼンテーションとなっているかどうか		3 点	プレゼン資料の準備、発表時に用いる表現やその順序が優れているだけでなく、声の大きさや視線、ジェスチャーも優れている。	1 点	プレゼン資料の準備、発表時に用いる表現やその順序について、あるいは、声の大きさや視線、ジェスチャーのいずれかが優れている。	1 点	プレゼンに対して十分に準備をしてきたとは言えない、あるいは、声が小さく自信がなさそうな印象を与えている。
観点 1 文章表現を的確にとらえ朗読することができるかどうか																																			
3 点	漢字の読みをあらかじめ調べており、難読語や特別な言い回しもスムーズに読むことができる。																																		
1 点	ところどころ漢字の読みを間違えたり、読み間違えをしている。																																		
1 点	間違えところが多く、スムーズな聞き取りがしにくい読み方をしている。																																		
観点 2 文章の内容を的確にとらえ伝達することができるかどうか																																			
5 点	筆者の独特の言い回しや、主張を分かりやすくみ抜き、うまく言い換えて伝えることができる。																																		
1 点	筆者がこの文章で何が言いたいのがよくまとめられており理解できる。																																		
1 点	筆者がこの文章で伝えたいことが不明瞭で、単に本文を切り貼りしてまとめただけの説明になっている。																																		
観点 3 文章の内容を補完する具体的な資料を示し、探究的・分析的なプレゼンができるかどうか																																			
9 点	該当の文章に関連する具体的な図やデータ、実物資料などを用いて筆者の主張の理解に加え、自らの視点で分析できている。																																		
1 点	該当の文章に関連する具体的な資料を本文で紹介されたもの以外に見つけ、用いている。																																		
1 点	該当の文章に関連する具体的な資料として本文で紹介された作品やデータだけを取り上げている。																																		
観点 4 伝達しようという意欲の伝わるプレゼンテーションとなっているかどうか																																			
3 点	プレゼン資料の準備、発表時に用いる表現やその順序が優れているだけでなく、声の大きさや視線、ジェスチャーも優れている。																																		
1 点	プレゼン資料の準備、発表時に用いる表現やその順序について、あるいは、声の大きさや視線、ジェスチャーのいずれかが優れている。																																		
1 点	プレゼンに対して十分に準備をしてきたとは言えない、あるいは、声が小さく自信がなさそうな印象を与えている。																																		
宿題指示	①講読・プレゼンを聞いて記録したこと、考察したことをまとめたプリント（ポートフォリオ）を完成させる。																																		
	②「研究計画書」を完成させる。																																		

授業日	5/14(火)	1 学期授業回数	4 回目 / 全 9 回
本時 学習目標	主なターゲット【知識・技能】② 【思考力・判断力・表現力】①②③【学びに向かう力・人間性】②③		
	本時の具体的な目標 <ul style="list-style-type: none"> ・具体的な事例からサイエンスアートの社会的機能について言葉で説明できるようになる ・興味関心に基づいて設定した探究テーマが他者とどのように関連させることができるのか調整することができる 		
時間 授業内容	5 時間目	生徒による『問から始めるアート思考』の講読、プレゼンを行った。長谷川愛や福原志保らのバイオアートの事例を取り上げ、科学者とアーティストの未来の示し方の違いについて理解を深めた。 また、脇田玲や落合陽一のサイエンスアートがテクノロジーを通してむしろ、よりアナログな見えない体感世界を具現化する人間の根源を問うような作品であることに触れた。生徒はそれぞれ調べてきた他の具体例を通して本文の理解を深めた。	
	6 時間目	自分の探究テーマや研究計画をもとに研究調査班に分かれて共同研究の可能性について模索した。 同じようなコンテンツを扱うチームの中でも関心事や手法の違いがみられ、どのように協同することで、どのような探究が可能であるのかを話し合った。 次回の授業ではより具体的な研究の展望や仮説の立案をすることを指示した。	
評価方法	講読・プレゼン用のルーブリックに基づいて相互評価を行った。 また、記録と考察の欄は後日、別のルーブリックに基づいて評価する。 評価項目は前回と同様。		
宿題指示	①講読・プレゼンを聞いて記録したこと、考察したことをまとめたプリント（ポートフォリオ）を完成させる。 ②研究調査班別の「研究計画書」のうち、文献等資料の調査の欄を埋めてくること。		

授業日	5/28(火)	1 学期授業回数	休校により実施せず
-----	---------	----------	-----------

授業日	6/4(火)	1 学期授業回数	5 回目 / 全 8 回
本時 学習目標	主なターゲット【知識・技能】②【思考力・判断力・表現力】①②③【学びに向かう力・人間性】②③ 本時の具体的な目標 ・デジタルアートの可能性がエンターテインメントや広告の要素とどのような関係にあるのかを具体的な事例を念頭に理解することができる。 ・探究テーマに関する先行文献や先行事例について把握することができる。		
時間 授業内容	5 時間目	生徒による『〈問い〉から始めるアート思考』の講読、プレゼンを行った。真鍋大度によるライゾマティクスのパフォーマンスがエンターテインメントや広告の域を超えていかにして「アート」であるのかという点について理解を深めた。また、筆者がチームラボをエンターテインメントの域を超えないとした理由について考察した。	
	6 時間目	それぞれの探究のテーマについて「先行研究や先行事例」を調べてくるよう課していた。それぞれ、「文献」「論文」「インターネット」と3種類の情報をシェアすることで、自分たちがこれから取り組もうとしているテーマがどこまで明らかになり、実行されているのかということ把握した。グループ内プレゼンを行い、調べてきた内容の相互理解を深めた。	
評価方法	①講読・プレゼン用のルーブリックに従って相互評価を行った。 また、記録と考察の欄は後日、別のルーブリックに基づいて評価する。 ②先行研究・先行事例に関する調査プレゼンの内容を評価する。		
宿題指示	① 講読・プレゼンを聞いて記録したこと、考察したことをまとめたプリント（ポートフォリオ）を完成させる。		

授業日	6/11(火)	1 学期授業回数	6 回目 / 全 8 回
本時 学習目標	主なターゲット【知識・技能】②【思考力・判断力・表現力】①②③【学びに向かう力・人間性】②③		
	本時の具体的な目標		
	・デジタルアートと本物であることの意味についてブロックチェーン技術の活用から考察することができる		
	・探究のグループで研究について話し合うことで課題解決への展望を見通すことができる。		
時間 授業内容	5 時間目	生徒による『〈問い〉から始めるアート思考』の講読、プレゼンを行った。ビーブルの『エブリデイズ 最初の 5000 日』を取り上げ、複製可能で可塑的なデジタルデータがオリジナルであることを保証することがデジタルアートをアートの真作として存在させるのに必須であることに理解を深めた。その作品が生まれた文脈を背負うことで価値が認められているということはアートの作品論に通じる考察へと繋がった。	
	6 時間目	グループに分かれて今後の研究の計画を話し合った。何がどこまで明らかになっており、自分たちは何に対して取り組むべきかということに気づくことができた。まだ研究計画の展望として甘いところもあるので、引き続き話し合いを進めていくこととした。	
評価方法	①講読・プレゼン用のルーブリックに従って相互評価を行った。		
	また、記録と考察の欄は後日、別のルーブリックに基づいて評価する。		
	②今後の研究活動の見通しについてまとめるプリントをその記述内容の濃淡で評価する。		
宿題指示	特になし		

授業日	6/18(火)	1 学期授業回数	7回目 / 全8回
本時 学習目標	主なターゲット【知識・技能】② 【思考力・判断力・表現力】①②③【学びに向かう力・人間性】②③		
	本時の具体的な目標		
	・セカンダリーマーケット（転売市場）における具体的な事例を通して、アートの追及権と著作権の違いについて理解することができる。		
	・ジェネリックアート（偽物）が市場においてどのような位置づけをされているのか、また、そのことがオリジナルの作家にどのような影響を与えているのかを理解することができる。		
	・グループで話し合い、研究の計画を展望することができるとともに、自身がどのような役割を果たすべきであるのかを言語化することができる。		
時間 授業内容	5 時間目	『〈問い〉から始めるアート思考』を講読し、生徒によるプレゼンテーションを行った。	
		村上隆らによる「カイカイキキの訴訟」の具体例を挙げながら、日本におけるアーティストの追及権の問題に触れ、創作活動と経済性の両立といった課題について考察した。また、セカンダリーマーケットにおいて、転売ヤーによる喧伝がある特定のアートを流行の中に位置づけようとすることで、結果としてジェネリックアートとして、オリジナルの二番煎じとしての立場を強いられる例をあげながら、消費者とアートの問題について考察した。	
	6 時間目	各グループで「研究計画のプレゼン」を作成した。話し合いのセレンディピティ（偶発性）を活かしながらも、どこかで形にしなければならないので、一人一人が具体的にどのような研究・行動をとるべきかを自覚することにつながった。	
評価方法	①講読・プレゼン用のルーブリックに従って相互評価を行った。		
	また、記録と考察の欄は後日、別のルーブリックに基づいて評価する。		
	②グループ研究計画プレゼンの内容を評価する。		
宿題指示	・グループ研究計画のプレゼンを準備してくる		

授業日	6/25(火)	1 学期授業回数	8 回目 / 全 8 回
本時 学習目標	主なターゲット【知識・技能】② 【思考力・判断力・表現力】①②③【学びに向かう力・人間性】②③		
	本時の具体的な目標		
	・ マーティングリードのパフォーマンスを通して「アートが人々の意識を拡張する」ということを理解することができる。 ・ 研究計画を発表し結果と手段の整合性や問の妥当性について気づくことができる。		
時間 授業内容	5 時間目	『〈問い〉から始めるアート思考』を講読し、生徒によるプレゼンテーションを行った。 マーティングリード「創作物がないアート」は鑑賞者が普段の生活で見落としていることや意識しないことに焦点を当てることを意図していたと理解した。意識の壁を打ち破り、それまで見えなかったことを意識させる仕掛けがアートの機能である、ということをもとに具体例を示しながらプレゼンテーションを行った。	
	6 時間目	各グループの研究計画についてプレゼンを行い、相互にアドバイスすることで、研究プロセスの実現可能性や問いと仮説の妥当性について検証した。	
評価方法	①講読・プレゼン用のルーブリックに従って相互評価を行った。 また、記録と考察の欄は後日、別のルーブリックに基づいて評価する。 ②グループ研究計画プレゼンの内容を評価する。		
宿題指示	アートライター賞の日本語原稿を 7 月末日までの提出期限とした。		

授業日	9/10(火)	2 学期授業回数	1 回目 / 全 10 回
本時 学習目標	主なターゲット【知識・技能】②【思考力・判断力・表現力】①②③【学びに向かう力・人間性】②③		
	本時の具体的な目標 ・ 遠藤一郎のパフォーマンスアートや会田誠の社会批判が岡本太郎の「意識の壁を打ち破る」という考え方に通じていることを理解し、現代アートの表現の在り方についてイメージすることができる。 ・ グループ研究の現在までの成果と問題点を俯瞰し、これからの研究計画を見通すことができる。		
時間 授業内容	5 時間目	『問から始めるアート思考』を通読し、遠藤一郎や会田誠、ジョシュ・スミスについて担当生徒によるプレゼンを行った。プリミティブな感覚と現代的表現手法の交感のなかに岡本が提唱した「意識の壁を打ち破る」という常識を疑い、批判する精神性が内包されていることを確認した。	
	6 時間目	アートライター賞の英語部門に向けて、エッセイを英訳するためのポイントを解説した。 グループ研究の途中経過についてプレゼンにまとめるワークを行った。今後の研究の展望を話し合った。	
評価方法	ルーブリックに基づいた相互評価、教員評価によって数値化する。		
宿題指示	・ アートライター賞出品のためのエッセイの英訳。 ・ グループ発表のためのプレゼン作成		

授業日	9/17(火)	2 学期授業回数	2 回目 / 全 10 回
本時 学習目標	主なターゲット【知識・技能】② 【思考力・判断力・表現力】①②③【学びに向かう力・人間性】②③ 本時の具体的な目標 ・Chim ↑ Pom の芸術表現が社会風刺を前提としており、その存在自身がアートの文脈から逃れようとしているということの意味が理解できる。 ・グループワークを通してこれまでの探究の精査と今後の研究を見通すことができる。		

時間 授業内容	5 時間目	『「問い」から始めるアート思考』を通読し、Chim↑Pom の表現がアートの文脈に位置づけられるとともに、アートそのものから逸脱しようとしているという点を確認した。生徒によるプレゼンを行い、そのなかで広島「原爆ドーム」の上空に飛行機雲で表現する『ヒロシマの空をピカッとさせる』という物議を生んだ作品について考察した。
	6 時間目	グループワークを行い、次回以降のプレゼンの準備を話し合った。
評価方法	ルーブリックに基づいた相互評価、教員評価によって数値化する。	
宿題指示	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ発表のためのプレゼン作成 ・高等部生への質問調査を希望する場合はその内容を考える 	

授業日	9/24(火)	2 学期授業回数	3 回目 / 全 10 回																																								
本時 学習目標	主なターゲット【知識・技能】② 【思考力・判断力・表現力】①②③【学びに向かう力・人間性】②③																																										
	本時の具体的な目標																																										
	・現代社会の課題をシニカルにかつユーモラスなアートの表現とその意図について理解することができる。																																										
	・他者の研究の内容を批判的に評価することにより、自己省察につなげることができる。																																										
時間 授業内容	5 時間目	『「問い」から始めるアート思考』を通読し、Chim↑Pom のスーパーラット の概念、生命倫理を問われかねない社会風刺の作品を通して現代アートの表現とその意図についてのプレゼンを行った。「社会に向けられた問いとアーティストの意志」がアートの成立には不可欠であるというポイントを押さえた。																																									
	6 時間目	グループ研究の中間発表プレゼンを行った。「排除アート」班は街に設置されているオブジェやベンチの装飾が社会的弱者だけでなく一般の市民をも排除することになってはいないかというフィールドスタディの報告が中心だった。「AI とアート」班は AI と創作表現活動の関係における問題点を整理し、特に著作権や表現としての独自性について注目していた。「多様性とアート」班は、障がい者アートを展示する行政のずさんさ、一般のアート作品との扱いの違いについて具体的な展示会を分析することによって整理していた。																																									
評価方法	・以下のルーブリックに基づいた相互評価、教員評価によって数値化する。																																										
	<table><tr><td>観点①</td><td>研究の目的が明確であり夏休みの取り組みが仮説の検証に生きる内容となっている。</td></tr><tr><td>5 点</td><td>何を明らかにするのか、解決するのがはっきりしており、立てた仮説と関係のある活動が行えている。</td></tr><tr><td>3 点</td><td>何を明らかにするのか、解決するのがわかるが、活動の内容が仮説を明らかにするには至っていない。</td></tr><tr><td>1 点</td><td>何を明らかにするのか、解決するのも明らかでない、または仮説を立てずに行動のみにとどまっている。</td></tr><tr><td>観点②</td><td>夏休みの取り組みが表面的な行動にとどまらず「分かったこと」から「分析や考察」に繋げることができている。</td></tr><tr><td>5 点</td><td>取り組みの結果が分かりやすくまとめられており、そこから何を考え明らかにしたのかがはっきりとしている。</td></tr><tr><td>3 点</td><td>取り組みの結果はわかりやすいが、そこから何を考え明らかにしたのかが分かりにくい。</td></tr><tr><td>1 点</td><td>とにかく夏休みに「何かをした」とどまり、研究活動として意味あるものとなっていない。</td></tr><tr><td>観点③</td><td>一部の人だけでなく、分析と考察やプレゼン準備により多くのメンバーが関わることができている。</td></tr><tr><td>5 点</td><td>グループの構成メンバー全員が何かしらの役割を担って取り込んだということがわかる。</td></tr><tr><td>3 点</td><td>複数の人が関わっていることが伝わるが、特定の人の役割に依存しているような比重である。</td></tr><tr><td>1 点</td><td>プレゼン発表をしている人、またはスライドを作った人しか稼働していない。</td></tr><tr><td>観点④</td><td>夏休みの取り組みを裏付ける「文献資料やデータ」を組み合わせて活用することができている。</td></tr><tr><td>5 点</td><td>具体的な参考文献や論文、または自分たちで収集したデータをエビデンス（根拠）として分析している。</td></tr><tr><td>3 点</td><td>具体的な参考文献や論文、または自分たちで収集したデータを取り上げている。</td></tr><tr><td>1 点</td><td>特に参考文献や論文、データを用いた発表になっていない。</td></tr><tr><td>観点⑤</td><td>夏休みの取り組みが自分たちの枠を超えて社会の中で検証するものとなっている。</td></tr><tr><td>5 点</td><td>実際に街へ出て調査をしたり、関係者にインタビューするなど手元の資料だけに留まらない活動となっている。</td></tr><tr><td>3 点</td><td>手元の資料だけを使って広く社会について考察しようとしている。</td></tr><tr><td>1 点</td><td>自分たちの話合いの域を出ていない。</td></tr></table>			観点①	研究の目的が明確であり夏休みの取り組みが仮説の検証に生きる内容となっている。	5 点	何を明らかにするのか、解決するのがはっきりしており、立てた仮説と関係のある活動が行えている。	3 点	何を明らかにするのか、解決するのがわかるが、活動の内容が仮説を明らかにするには至っていない。	1 点	何を明らかにするのか、解決するのも明らかでない、または仮説を立てずに行動のみにとどまっている。	観点②	夏休みの取り組みが表面的な行動にとどまらず「分かったこと」から「分析や考察」に繋げることができている。	5 点	取り組みの結果が分かりやすくまとめられており、そこから何を考え明らかにしたのかがはっきりとしている。	3 点	取り組みの結果はわかりやすいが、そこから何を考え明らかにしたのかが分かりにくい。	1 点	とにかく夏休みに「何かをした」とどまり、研究活動として意味あるものとなっていない。	観点③	一部の人だけでなく、分析と考察やプレゼン準備により多くのメンバーが関わることができている。	5 点	グループの構成メンバー全員が何かしらの役割を担って取り込んだということがわかる。	3 点	複数の人が関わっていることが伝わるが、特定の人の役割に依存しているような比重である。	1 点	プレゼン発表をしている人、またはスライドを作った人しか稼働していない。	観点④	夏休みの取り組みを裏付ける「文献資料やデータ」を組み合わせて活用することができている。	5 点	具体的な参考文献や論文、または自分たちで収集したデータをエビデンス（根拠）として分析している。	3 点	具体的な参考文献や論文、または自分たちで収集したデータを取り上げている。	1 点	特に参考文献や論文、データを用いた発表になっていない。	観点⑤	夏休みの取り組みが自分たちの枠を超えて社会の中で検証するものとなっている。	5 点	実際に街へ出て調査をしたり、関係者にインタビューするなど手元の資料だけに留まらない活動となっている。	3 点	手元の資料だけを使って広く社会について考察しようとしている。	1 点	自分たちの話合いの域を出ていない。
観点①	研究の目的が明確であり夏休みの取り組みが仮説の検証に生きる内容となっている。																																										
5 点	何を明らかにするのか、解決するのがはっきりしており、立てた仮説と関係のある活動が行えている。																																										
3 点	何を明らかにするのか、解決するのがわかるが、活動の内容が仮説を明らかにするには至っていない。																																										
1 点	何を明らかにするのか、解決するのも明らかでない、または仮説を立てずに行動のみにとどまっている。																																										
観点②	夏休みの取り組みが表面的な行動にとどまらず「分かったこと」から「分析や考察」に繋げることができている。																																										
5 点	取り組みの結果が分かりやすくまとめられており、そこから何を考え明らかにしたのかがはっきりとしている。																																										
3 点	取り組みの結果はわかりやすいが、そこから何を考え明らかにしたのかが分かりにくい。																																										
1 点	とにかく夏休みに「何かをした」とどまり、研究活動として意味あるものとなっていない。																																										
観点③	一部の人だけでなく、分析と考察やプレゼン準備により多くのメンバーが関わることができている。																																										
5 点	グループの構成メンバー全員が何かしらの役割を担って取り込んだということがわかる。																																										
3 点	複数の人が関わっていることが伝わるが、特定の人の役割に依存しているような比重である。																																										
1 点	プレゼン発表をしている人、またはスライドを作った人しか稼働していない。																																										
観点④	夏休みの取り組みを裏付ける「文献資料やデータ」を組み合わせて活用することができている。																																										
5 点	具体的な参考文献や論文、または自分たちで収集したデータをエビデンス（根拠）として分析している。																																										
3 点	具体的な参考文献や論文、または自分たちで収集したデータを取り上げている。																																										
1 点	特に参考文献や論文、データを用いた発表になっていない。																																										
観点⑤	夏休みの取り組みが自分たちの枠を超えて社会の中で検証するものとなっている。																																										
5 点	実際に街へ出て調査をしたり、関係者にインタビューするなど手元の資料だけに留まらない活動となっている。																																										
3 点	手元の資料だけを使って広く社会について考察しようとしている。																																										
1 点	自分たちの話合いの域を出ていない。																																										
宿題指示	次回のプレゼン担当班は準備をしてくる、 また、AI 班はデジタルアートの鑑賞、幼児教育班は初等部での対話型鑑賞ワークショップを企画するよう指示した。 アートライター賞に出品する。（手続きを完了して提出した原稿を印刷してくること）																																										

授業日	10/1(火)	2 学期授業回数	4 回目 / 全 10 回
本時 学習目標	主なターゲット【知識・技能】② 【思考力・判断力・表現力】①②③【学びに向かう力・人間性】②③		
	本時の具体的な目標 ・芸術祭による地域振興の成功例を通して地域性とアートとのかかわりについて考察することができる。 ・他者の研究の内容を批判的に評価することにより、自己省察につなげることができる。		
時間 授業内容	5 時間目	『「問い」から始めるアート思考』を通読し、北川フラムによる大地の芸術祭や瀬戸内芸術祭などがいかに地域振興につながっているのかを確認する。その中で、サイトスペシフィック（地域性を活用しその土地でなければ成立しない性質）なアートが地域のコミュニティを巻き込むプロセスを含むことで活性化しているという具体例に触れた。生徒によるプレゼンテーションによって、具体的な事例とそこからどのような問いを見出すことができるかについて考えることができた。 対話型鑑賞の具体例として教員がファシリテーションを行い2つの作品を鑑賞した。	
	6 時間目	グループ研究の中間プレゼンを行った。「空き家活用」班は常設型のパブリックアートがプロジェクトとして地域振興に役立つ機能がどこまで有効であるのかを疑問視し現地調査の動機とすることができていた。「風景画と観光」班は写真ではなく風景画によって観光を促進するプロジェクトを提案した。スポーツと組み合わせることにより実行力のあるプランとして考察できていた。「パブリックアート」班は都市部でのアート設置が機能するためにはどのような展開が可能であるのかを模索していた。「アート教育」班は幼稚園での対話型鑑賞から問題点を洗い出し、小学校での取り組みへとつなげることができていた。具体的な授業案の作成に取り掛かり自習での実践につなげようとしていた。	
評価方法	先週と同様のルーブリックで評価する。		
宿題指示	アート教育班は対話型鑑賞の具体的な問答を想定すること、空き家活用班は週末のフィールドスタディに向けて課題を洗い出すことを指示した。		

授業日	10/8(火)	2 学期授業回数	5 回目 / 全 10 回
本時 学習目標	主なターゲット【知識・技能】② 【思考力・判断力・表現力】①②③【学びに向かう力・人間性】②③ 本時の具体的な目標 ・「形を残さない建築」を通して都市や建築の機能を問い直すアート作品の趣旨を理解できる。 ・グループワークによって中間発表の振り返り、それを活かして今後の研究計画を立てることができる。		
時間 授業内容	5 時間目	石上純也『ソラトツチニキエル』や吉井仁美がディレクションした「テントプラン」を通して、一定の場所に固定されない建築作品が建築や都市の機能をどのように捉えなおすことに繋がっているのかということを生徒の講読とプレゼンによって理解させた。 前回の中間発表を振り返り、これまでの研究の課題を修正したり、今後の展開を計画する時間とした。 また、「対話型鑑賞」の班は関西学院初等部 4 年 C 組に出向き、立体作品の対話型鑑賞ワークショップを行った。具象的立体作品からは児童の闊達な意見を引き出すことができたものの、抽象的な立体作品には対象に根拠を求める発話が難しく、一面的な捉え方に終始せざるを得ない場面が見受けられた。今後、発話の形態やファシリテーションの方法を見直し研究活動に活かすよう指示した。	
評価方法	先週と同様のルーブリックで相互評価、教員評価を行った。		
宿題指示	特になし		

授業日	10/22(火)	2 学期授業回数	6 回目 / 全 10 回
本時 学習目標	主なターゲット【知識・技能】② 【思考力・判断力・表現力】①②③【学びに向かう力・人間性】②③		
	本時の具体的な目標 ・「あいちトリエンナーレ 表現の不自由展」にまつわる課題の構造を見抜くことができる。 ・目標とする研究成果から逆算し現状に何が足りていないのかを明示した研究計画を立てることができる。		
時間 授業内容	5 時間目	『問いから始めるアート思考』を講読し、「物質性を伴わないアートのカタチ」や「あいちトリエンナーレ表現の不自由展」について生徒が具体例を示しながら筆者の主張を再構築しプレゼンテーションを行った。その際に、特に「表現の不自由展」から見いだせる課題がどのような制度（構造）から生じているものなのかを取り上げた。表現の自由と公共の福祉とのバランスは公権力をどこまで容認するのかという非常に微妙な問題であることに気付くことができた。	
	6 時間目	それぞれのグループが研究をどのような形で結実させていくのか展望を話し合った。その際に、まだ足りていない情報や、考え切れていないトピック、まとまっていないアイデアなどについて整理し、今後の研究計画を立て直した。 来週はそれぞれの活動として、「観光とアート」の班が、「風景画」を使った観光の在り方を検証するために西宮市内をフィールドワークする。また、「AI とアート」の班は探究型カリキュラム「A I 活用」の授業を受講している同級生と「A I と創造性」をテーマに話し合いをする。「アートと多様性」の班は「日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS」のスタッフの方へインタビューする予定だ。	
評価方法	先週と同様のルーブリックで相互評価、教員評価を行った。		
宿題指示	各班の来週の取り組みに向けて準備をする。		

授業日	10/29(火)	2 学期授業回数	7 回目 / 全 10 回
本時 学習目標	主なターゲット【知識・技能】② 【思考力・判断力・表現力】①②③【学びに向かう力・人間性】②③		
	本時の具体的な目標		
	・ 評論家や画家、デザイナーがアートとどのように向き合い思考を深めているのか実例を知ることによりアート思考とはどのようなものであるのかをイメージし言語化することができる。		
	・ グループワークを通して自分たちの発表に対する展望を具体的に把握することができる。		
時間 授業内容	5 時間目	グループワークで発表の準備を行う。	
		AI とアートについて研究している班は探究型カリキュラム「AI 活用」の授業へ参加し、「アートと AI」についてディスカッションを行った。	
	6 時間目	『〈問い〉から始めるアート思考』を講読し、生徒によるプレゼン発表を行った。	
		白洲正子、小林秀雄、東山魁夷、倉俣史朗と筆者との交流の中で作品とどのように向き合っていたのかその姿勢の在り方について理解を深めた。その際に、アート思考とはどのようなものでそこからどのように「問を見つける力」につなげていくことができるのかをイメージした。最後に「アートは分からない」という人に向けてどのような声をかけるのか、といったテーマで自由作文を課した。	
評価方法	前回と同様のルーブリックにて相互評価、教員評価をする。		
宿題指示	グループ研究を進めるとともに、発表の準備をしておく。		
	「アートは分からないという人にどのような声掛けをするのか」というテーマで自由作文を提出する。		

授業日	11/12(火)	2 学期授業回数	8 回目 / 全 10 回
本時 学習目標	主なターゲット【知識・技能】 【思考力・判断力・表現力】 【学びに向かう力・人間性】		
	本時の具体的な目標 ・ アートの本質が「表現」にではなくその作品が提示する「問い」にあるという考え方を説明することができる。 ・ 評価基準を意識したグループワークを通して今までの学びを総括するプレゼンテーションを作成することができる。		
時間 授業内容	5 時間目	『「問い」から始めるアート思考』を講読し、生徒のプレゼンを通して内容を理解した。また、「アート」によって考え方や価値観が転換する具体例を示しながら、そのきっかけとなる「問い」をいかに気づくことができるか、がアート鑑賞の大きな課題であることを学ぶことができた。	
	6 時間目	評価基準を丁寧に理解し、何を目的にプレゼンテーションを作成すべきかを意識することができた。また、その目標に向けてどのような手順、作業が必要であるかをグループで確認した。	
評価方法	前回までと同様のルーブリックで、相互評価、教員評価を行った。		
宿題指示	プレゼン発表の準備		

授業日	11/19(火)	2 学期授業回数	9 回目 / 全 10 回
本時 学習目標	主なターゲット【知識・技能】③ 【思考力・判断力・表現力】③【学びに向かう力・人間性】③		
	本時の具体的な目標 ・アートと社会について課題を見出し論理立てて研究成果を発表することができる。 ・他者の発表をルーブリックに基づいて評価し、自分たちのグループの省察につなげることができる。		
時間 授業内容	5 時間目 6 時間目	1 年間グループで研究を行ってきた内容について具体的な提案を伴った成果発表を行った。 A 班「AI とアート～AI によるアートは今後発展するのか～」 B 班「教育とアート～どのようなアート教育をするべきなのか～」 C 班「パブリックアート～地域活性化計画～」 D 班「空き家とアート～アートによる地域課題の解決～」 E 班「排除アート～行政における適切な排除アートの設置とは～」 F 班「多様性とアート～障がい者アートの適切な普及とは～」 G 班「観光とアート～風景画による観光資源の活性化～」 各班、課題を明確化しその点について具体的な対策を示すことを心がけたが、十分でないところを 教員、他の生徒から指摘しあい、次週のプレゼンへ向けて改善するよう声掛けを行った。	
評価方法	ルーブリック評価に基づく相互評価と教員評価 観点①アートと社会について独自の観点で課題を見出すことができている。 A 評価：社会課題を具体的に示し、その課題の解決にアートが効果的に関与していることが明確である。 観点②先行研究がどこまでかを明らかにしており、自分たちはそこに何を付け加えて提案できているのかを明示できている。 A 評価：先行研究や現行の事例を挙げて分析し、それを踏まえて自分たちなりの提案を具体的に示すことができている。 観点③解決に向けて実際の事物や仕組み、考え方を提示できている。 A 評価：提案が概念的なもので終始するのではなく企画立案を伴う具体的なものとして提示することができる。 観点④プレゼンテーションとして構成が練られており、何を伝えたいのかが分かりやすくまとめられている。 A 評価：課題の設定から解決に向けての論理的な展開が考慮されており、一つ一つの要素が飛躍せずに順序良く説明されている。		
宿題指示	プレゼン内容を精査し、次回に向けて話し合い改善してくる。		

授業日	11/26(火)	2 学期授業回数	10 回目 / 全 10 回
本時 学習目標	主なターゲット【知識・技能】 【思考力・判断力・表現力】 【学びに向かう力・人間性】		
	本時の具体的な目標 ・アートと社会について課題を見出し論理立てて研究成果を発表することができる。 ・他者の発表をルーブリックに基づいて評価し、自分たちのグループの省察につなげることができる。		
時間 授業内容	5 時間目 6 時間目	1 年間グループで研究を行ってきた内容について具体的な提案を伴った成果発表を行った。 1 班「観光とアート～風景画による観光資源の活性化～」 2 班「多様性とアート～障がい者アートの適切な普及とは～」 3 班「排除アート～行政における適切な排除アートの設置とは～」 4 班「空き家とアート～アートによる地域課題の解決～」 5 班「パブリックアート～地域活性化計画～」 6 班「教育とアート～どのようなアート教育をするべきなのか～」 7 班「AI とアート～AI によるアートは今後発展するのか～」 時任教授をゲストに迎え各班に対する講評を頂き、他校の探究の取り組みとの比較やデータ活用、アクションプランの実現可能性など客観的な視点で叱咤激励を受けることができた。 具体的なアクションプランの提示までは触れられている研究がほとんどだが、特に「地域」や「社会」に対するものは当事者としての活動にまで到達していない点が課題として浮き彫りになった。 予算や時間的な制限がある中でいかに「実際的な課題を見出しその解決に向けて実行できるか」という点について振り返る必要がある。 ただし、先行研究や調査過程でのテーマ再設定など探究活動として深く考察を伴ったものとして成果をまとめられている点については評価できる。	
評価方法	前回と同様のルーブリックにて生徒相互評価・教員評価を行う。		
宿題指示	個人振り返りレポートを提出する。		